

～「天下三分の宣誓書」から読み取る金子直吉の経営戦略～ (レジメ)

鈴木商店記念館 小宮由次

本日の講演の次第

- I. 「鈴木商店記念館」について
- II. 「鈴木商店」について
- III. 金子直吉の人となり
- IV. 「天下三分の宣誓書」について

I. 「鈴木商店記念館」について

“鈴木商店記念館”は、2014年4月、バーチャルミュージアムとしてインターネット上に立ち上げたホームページです。

明治・大正・昭和にかけて大きな足跡を残し、忽然と姿を消した幻の総合商社・鈴木商店の軌跡を辿り、その功績を顕彰し、広く多くの方々に知っていただくことを目的としています。

トップ画面は、鈴木商店の関係する画像をスライドショー形式でご案内していますが、鈴木商店を「歴史」「企業」「地域」「人物」の4つのカテゴリーから紹介しています。

II. 「鈴木商店」について

神戸開港間もない明治7年、居留地商館との外国産砂糖（洋糖）引取商としてスタートした鈴木商店は、創業者・鈴木岩治郎の才覚で神戸八大貿易商として歩み始めた最中、52歳の若さで岩治郎が急逝。

事業を引き継いだ未亡人・鈴木よねを支えた二人の番頭・柳田富士松、金子直吉の活躍で事業を拡大、短期間で三井に肩を並べる程に急成長。世界の檣舞台に出た神戸の鈴木商店は、世界のSUZUKIとして名声を博しました。

第一次世界大戦を契機に飛躍した鈴木商店は、大戦終了による反動不況からデフレの時代に突入すると急拡大策も裏目に出してしまいます。海軍拡張計画（八八艦隊の建造）

を機に挽回を試みるも大正 11(1922)年のワシントン海軍軍縮条約により頓挫、翌年に襲った関東大震災が苦境に拍車をかけました。そして昭和 2(1927)年、鈴木商店は破綻してしまいます。

III.金子直吉の人となり

○生い立ち

金子直吉のもともとの祖先は、桓武平氏の流れを汲む武蔵七党のうちの村山党の一族であったが、保元・平治の乱での功績により四国・伊予に領地を与えられ移り住んだ子孫で、戦国時代に四国を平定した長宗我部家の家臣となった金子備後守元宅^{かみもといえ}が直吉の祖先である。備後守は、天正 13(1585)年に豊臣秀吉の命を受けた小早川隆景によって滅ぼされ、300 年以上続く金子氏は滅亡した。愛媛県新居浜市に金子城跡がある。

元宅の四男は、土佐に逃れ、その数代後の子孫としての金子直吉は、高知県吾川郡名野川村(現・吾川郡仁淀川町)に生まれ、明治維新後の混乱期に親の家業(呉服反物を扱う店)は破綻し、6 歳のころから高知市に移り住む。

○幼少期・丁稚時代から鈴木商店へ

仁淀川町から高知市内の長屋に移り住み、丁稚奉公先を転々とした後、高知市農人町の傍士質店で働き始める。この質屋で主人に非凡の才能を見出され、傍士質店が砂糖商に商売変えをしたことから鈴木商店入店のきっかけとなった。

丁稚奉公時代は、極貧生活で小学校すら通えなかった。

○樟脳相場で大失敗

鈴木商店での見習い時代、金子直吉は担当する樟脳の相場を見誤り、ハタ売り(カラ売り)で莫大な損害を出してしまう。金子はハラ切り覚悟で居留地の外国商館と折衝し、一方の「お家さん」鈴木よねは、金子を咎めず、親族を頼りこの存亡の危機を乗り切る。

若き日のこの苦い経験から、金子は相場に対する慎重な姿勢が生まれたものと云われる。

金子の人となりについて、「帝人の歩み」に「金子は事業を興すに当たっては、綿密な計画を立てた後に、さらに人、金、時の三要素を充分勘案してからでなければ、決し

て動き出そうとはしなかった」との一文がある。ただ、機熟せりと見るや、疾風迅雷一気に全力を投入して商機を掴んだと云われる。

IV. 「天下三分の宣誓書」について

大正 4(1915)年 11 月、ロンドン出張所増員のため赴任の挨拶に訪れた小川実三郎に対して金子直吉は、所長・高畑誠一宛ての長文(6M 超)の手紙を託した。この手紙は後年、“天下三分の宣言書”或は“天下三分の宣誓書”と呼ばれる。

前年、第一次世界大戦による物資の欠乏と高騰を見越して全ての商品の一斉買い出動を敢行し、莫大な利益を得た鈴木商店は、急速に多角化を進め、天下に覇を唱える絶好の機会が到来するとの見通しから、金子はロンドンの高畑を始め鈴木店の社員全員に対する一大決意を発した。

中国の古典・三国志やその 1,000 年後に書かれた時代小説・三国志演義に記された“天下三分の計”に思いを馳せた金子の檄文であった。

この時、金子 49 歳、高畑 28 歳の若者であった。金子の激情と気迫溢れる檄文は、鈴木社員全員を鼓舞する金子の経営戦略を披歴するものであった。

◇「三井三菱を圧倒する乎、然らざるも彼等と並んで天下を三分する乎、是鈴木商店全員の理想とする所也。」

金子の檄文を結ぶのは、中国の古典「三国志」の“天下三分の計”になぞられてこのような表現を記していますが、金子の胸中は？

明治から大正初期の貿易業界を牽引した鈴木、三井が激しいデッドヒートを繰り広げ、三菱合資がいよいよ本腰を入れて貿易に乗り出そうとする中、金子直吉の天下を制する決意が溢れている。

“三井、三菱を圧倒するか・・・”と記すのは、三井物産、三菱合資のことであったが、当時の貿易業界にあって、金子が意識したのは三井物産で、三菱商事が台頭してくるまでの「鈴木・物産」の時代を制して日本一を実現する密かな自信が窺える。

完